

中小河川大束川河川改修事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査概報

川津一ノ又遺跡

平成 4 年度



1993. 3

香川県埋蔵文化財研究会

## 例　　言

- 1 本書は、中小河川大東川改修事業に伴い平成4年度に実施した香川県坂出市川津町一ノ又5254番地他に位置する川津一ノ又遺跡の埋蔵文化財発掘調査の概要を記録したものである。
- 2 本調査は、香川県土木部河川課からの依頼をうけ、香川県教育委員会が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
- 3 本年度の調査組織は、次のとおりである。

総括	所　　長	松本　豊胤
	次　　長	市原　敏則
総務	係　　長	土井　茂樹
	係　　長	今田　修
	主任主事	黒田　晃郎（平成4年5月31日まで）
	主任主事	大西　健司（平成4年6月1日から）
調査	文化財専門員	西村　尋文
（発掘）	主任技師	片桐　孝浩
	技　　師	清水　渉
	調査技術員	森澤　千尋

- 4 調査にあたっては、次の機関や方々の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同敬称略）  
香川県土木部河川課、坂出土木事務所、川津連合自治会（西又自治会）、西又水利組合、矢野幸平
- 5 本書は、西村尋文、片桐孝浩、清水　渉が執筆・編集し、遺構・遺物の実測・トレースは片桐・森澤千尋が行なった。
- 6 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。  
S H…竪穴住居　　S B…掘立柱建物　　S T…土壙墓　　S K…土坑  
S D…溝　　S P…柱穴　　S X…不明遺構
- 7 挿図の一部は、国土地理院地形図 丸亀（1/25,000）を使用した。

## 本文目次

1. 調査の経緯と経過 .....	(西村) .....	1
2. 立地と環境 .....		2
地理的環境 .....	(清水) .....	2
歴史的環境 .....	(清水・片桐) ...	2
3. 調査の概要 .....	(清水・片桐) ...	4
4. 遺構・遺物について .....	(清水・片桐) ...	4
5. おわりに .....	(清水・片桐) ...	9

## 挿図目次

第1図 調査地及び周辺遺跡 .....	3
第2図 S H01 検出状況 .....	4
第3図 S H01 平・断面図 .....	5
第4図 S H01 出土遺物 .....	6
第5図 II区 遺構検出状況（北西より） .....	6
第6図 II区中央部 遺構配置図 .....	7
第7図 S T01 検出状況 .....	8
第8図 S T01 出土遺物 .....	9
第9図 S T01 平・断面図 .....	9
第10図 川津一ノ又遺跡 遺構配置図 .....	11・12
第11図 I区 遺構検出状況（南東より） .....	11・12
第12図 S P201 断面 .....	11・12
第13図 S T03 検出状況 .....	11・12
第14図 S H02 検出状況 .....	11・12

## 表目次

第1表 周辺遺跡の概要 .....	2
第2表 遺構一覧 .....	10

## 1. 調査の経緯と経過

川津一ノ又遺跡は坂出市川津町一ノ又に所在し、大東川の西岸に位置する。この遺跡は今回の調査を含めて三度の調査実績がある。代表的な調査では、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター（以下センターと略称）が実施した四国横断自動車道（以下横断道と略称）の建設に伴う発掘調査がある。この調査により川津一ノ又遺跡が、弥生時代より中世にいたる、飯野山北麓の大規模な集落跡であることが明らかになった。

昭和63年4月香川県教育委員会は、香川県土木部河川課（以下河川課と略称）と、大東川河川改修事業の工事区域内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。その結果工事予定地内の埋蔵文化財については、事前にその有無を確認し適切な保護措置をはかる点で合意した。

平成3年3月香川県教育委員会は、川津一ノ又遺跡の東に隣接する大東川西岸の河川改修工事区域内の調査を実施した。この調査により、当該地の保護措置の必要な範囲が2,850m<sup>2</sup>であることと、川津一ノ又遺跡の範囲が大東川西岸域まで拡がることが明らかになった。その調査結果に基づき香川県教育委員会は河川課と協議を行い、横断道建設工事区域と接する部分の310m<sup>2</sup>については香川県教育委員会が平成3年度に発掘調査を実施することで合意し、同年8月・9月に調査を実施した。また、残りの2,540m<sup>2</sup>の取り扱いについて香川県教育委員会は、センター及び河川課と協議を重ね、平成4年度にセンターが発掘調査を実施することで合意し、平成4年4月1日付けでセンターとの間で「埋蔵文化財調査契約書」を締結した。

本調査の調査方法は、以下の方法による。

- ① 調査区は北よりⅠ～Ⅲ区の3区分とした。
- ② 調査杭の設置及び名称は横断道調査の調査成果との混乱を避けるため、横断道の調査に準じた。
- ③ 造構の測量は航空測量とした。
- ④ 作業員は直営での雇用とした。

調査は平成4年4月1日より開始し、同年9月30日に終了した。4月前半は進入路、現場事務所などの仮設工事、後半よりⅠ区から機械掘削にかかり、造構掘削は5月初頭より開始し8月末までを要した。小面積の割に造構の密度は高く、住居跡・溝・土坑・土壤幕など多数の造構が検出された。特にⅡ・Ⅲ区には自然地形の大きな落ち込みが確認された。この落ち込みからは複数の造構面が検出され調査工程の上で課題となった。出土遺物も多く、コンテナにして260箱を数えた。9月には、基礎整理、仮設備の撤去等を実施し現地調査を完了した。

## 2. 立地と環境

### 地理的環境

香川県内には讃岐山脈に発して瀬戸内海に注ぐ中小河川が形成する三島平野・丸亀平野・高松平野・志度平野などの小平野がある。このなかの丸亀平野には現在西から弘田川・金倉川・土器川・大東川の4河川がある。川津一ノ又遺跡は平野の東部、大東川によって形成された沖積平野部分にあり、現在の大東川の西岸際に位置する。南に飯野山、東に常山、金山、城山、北に角山、聖通寺山などがあり、西は丸亀平野部へと開けている。

### 歴史的環境

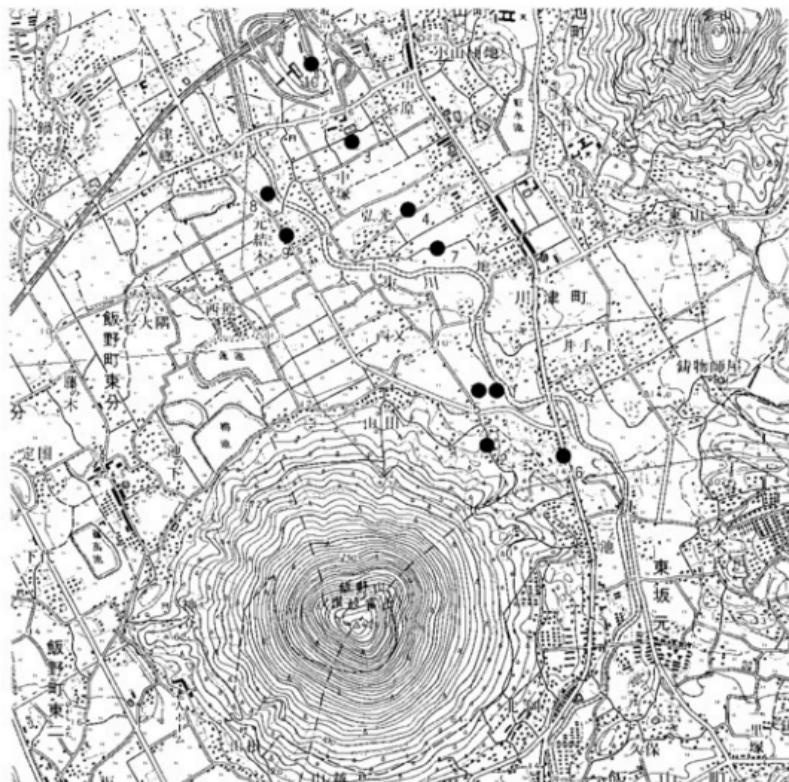
川津一ノ又遺跡の所在する坂出の平野では縄文時代の考古資料は現在のところ少ないので現状である。弥生時代になると下川津遺跡、元結木遺跡などを中心とする坂出の平野北部の集落と飯野山の北麓にある川津一ノ又遺跡を中心とする坂出の平野南部の集落が形成されていたようである。古墳時代になると弥生時代の集落を背景として、この地域でも前方後円墳と伝えられる川津茶臼山古墳など首長クラスを埋葬する古墳が造られ、畿内中枢の諸首長との関係を保持していたようである。その後古墳は小規模化し、古墳時代後期には青野山山塊、飯野山山麓に群集墳が形成されていく。また、下川津遺跡では古墳時代後期（7世紀初頭）の首長層の屋敷地が検出されていることや、古代から中世にかけての集落も確認されていることから、下川津遺跡を中心とし

第1表 周辺遺跡の概要

番号	遺跡名	所在地	調査年度	調査面積	種類	時代	文献
1	川津一ノ又遺跡	川津町	平成4年	2,540m <sup>2</sup>	集落	弥生～中世	
2	川津東山山遺跡 I区・II区	川津町 飯野町	平成2～3年	25,600m <sup>2</sup>	集落	弥生～古代	香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成2年度・3年度 香川県教育委員会
3	川津中塚遺跡 I区・II区	川津町	平成2～3年	20,990m <sup>2</sup>	集落	弥生～中世	香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成2年度・3年度 香川県教育委員会
4	川津下樋遺跡	川津町	平成2～3年	9,850m <sup>2</sup>	水田 自然河川	縄文～弥生	香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成2年度・3年度 香川県教育委員会
5	川津一ノ又遺跡 III区・IV区	川津町	平成2～3年	36,510m <sup>2</sup>	集落	弥生～中世	香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成2年度・3年度 香川県教育委員会
6	川津川西遺跡	川津町	平成2年	5,400m <sup>2</sup>	集落	縄文～中世	香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成2年度 香川県教育委員会
7	川津二代取遺跡	川津町	平成2年	10,400m <sup>2</sup>	集落 自然河川	弥生～中世	香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成2年度 香川県教育委員会
8	川津元結木遺跡	川津町	平成元年	1,200m <sup>2</sup>	集落	弥生～中世	新規社跡調査記録 平成元年 新規社跡 新規社跡 平成1年 新規社跡
9	川津西又遺跡	川津町	昭和63年	85m <sup>2</sup>	集落	弥生	香川県埋蔵文化財調査年報 昭和63年度 香川県教育委員会
10	下川津遺跡	川津町	昭和60～62年	89,800m <sup>2</sup>	集落	弥生～中世	瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発見調査報告書 下川津遺跡 1998 香川県教育委員会

た坂出の平野の北部が古代以来の中軸的な位置にあったことが想定できる。

一方、文献資料においては「川津」の地名が正倉院資料のなかに最初にみられ、東大寺文書では川津郷が東大寺の莊園（初期莊園）として租・庸・調が納められていたという記録が残っている。その後、律令国家の動搖のなかで初期莊園は解体していくが川津郷も同じ経過をたどったようである。13世紀になるとこの地域の一部で「春日社」の莊園「河津庄」が立庄されていたことを文献資料にみることができる。古代の終わりから中世にかけてこの辺りの莊園化が急速に進み、13~14世紀には当地域には公領川津郷と河津「庄」が併存していたようである。鎌倉時代末から室町時代初頭の内乱期には、当地域でも混乱が生じていることが文献に残されているが、それを最後に公領川津郷及び河津庄の記録は残っていない。そしてその後この地域の莊園秩序がどのように消滅していったかは明らかではない。



第1図 調査地及び周辺遺跡

### 3. 調査の概要

本年度の調査は、平成2年度、3年度に四国横断自動車道建設に伴い発掘調査が行なわれた川津一ノ又遺跡Ⅲ区・Ⅳ区（以下横断道調査と略称）の東方に位置する2540m<sup>2</sup>を対象として行なわれた。

当遺跡は調査の結果、地形的にみるとⅡ区南部からⅢ区にかけて自然の落ちがみられ、Ⅰ区とⅡ区北部を中心とする微高地状の部分とⅡ区南部とⅢ区を中心とする低湿地部分が確認された。調査区北部では同一面で弥生時代から中世までの遺構が認められたが、南部では低湿地部分の各堆積層上面で、上層から第1面が中世を中心とする時期、第2面が古墳時代から古代を中心とする時期、第3面が弥生時代を中心とする時期の計3つの遺構面から形成されていることが確認された。以後各時代の遺構の広がりと遺構についてその概略を紹介しておく。

### 4. 遺構・遺物について

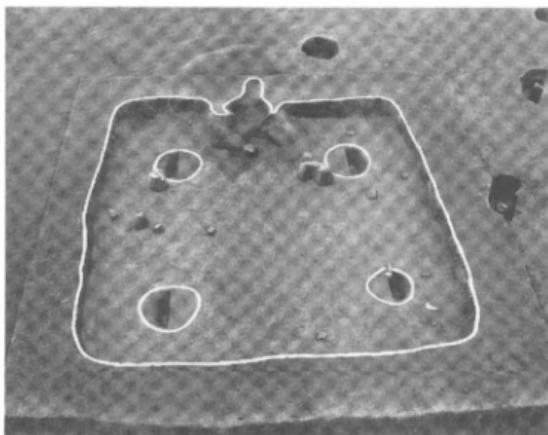
#### 弥生時代

弥生時代では中期後半と後期の遺構を検出した。

中期後半の遺構としては竪穴住居（SH03）、土坑（SK06）、溝（SD37）を調査区北部のⅠ・Ⅱ区北部で検出した。この時期では調査区南部においては砂の堆積が1mほどあり、低湿地の存在を窺わせる状況であった。したがってこの時期の遺構は主として調査区北部で検出されている。遺構はあまり多くなく、南部の低湿地の縁辺部において中期後半の集落を画すると思われる溝（SD37）をほぼ東西方向で検出した。規模は上幅1.35m、深さ0.46mで断面形態がU字を呈するものである。

竪穴住居（SH03）は調査区内で一部検出されたものであるが、平面形が円形を呈し、壁溝を有していることが確認されている。

後期の遺構としては竪穴住居（SH04・05）、掘立柱建物（SB15）、溝（SD28・35）が調査区全域で検出された。この時期に南部の低湿地は埋まっており、その堆積層の上面で掘立柱建物・溝などが検出されている。掘立柱



第2図 SH01 検出状況

建物は1間×2間（2.0m×2.98m）と規模が小さいものである。竪穴住居は2棟とも平面形が隅丸方形を呈しており、主軸がほぼ東北を向いている。竪穴住居（SH05）は検出遺構面から床面まで0.44mと深く、調査区壁際で炉を検出している。

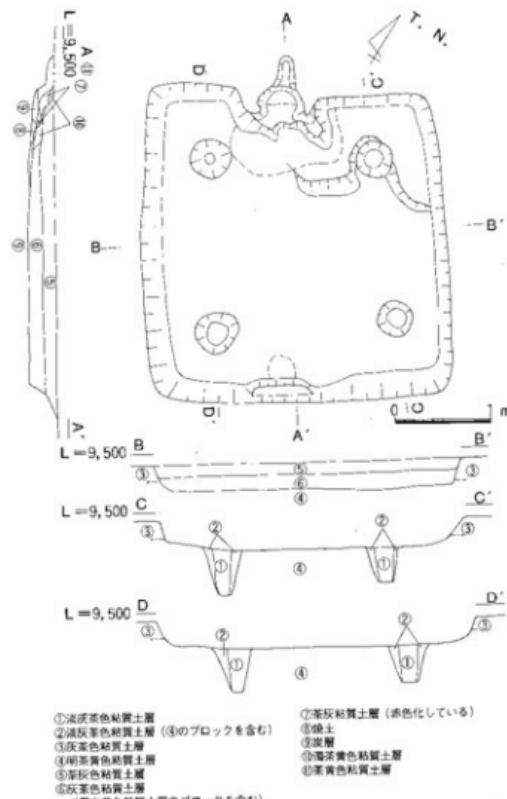
### 古墳時代（7世紀前半）

古墳時代の遺構としては竪穴住居（SH02）、掘立柱建物（SB09）、溝（SD07・16・36・39）を調査区全域で検出した。Ⅲ区で検出された竪穴住居（SH02）は平面形が隅丸方形を呈し、北壁中央部に造り付けのカマドをもつものである（第14図）。規模は長辺5.5m、短辺5.4m、深さ0.08mを計る。床面から多数の柱穴が出土していることから数回の立て替えがあったものと考えられる。北部暗溝より7世紀前半の須恵器壺蓋が出土している。また、Ⅰ区で検出されたSD07は南北方向に流路をとるもので、上幅3.1m、深さ1.2mの断面U字形を呈するものである。溝の堆積埋土は暗灰色粘質土層と暗茶灰色粘質土層の上下2層に大別でき、その上層埋土は白黄色粘質土の地山を大量に含んでおり、意図的に埋められた形跡がみられる。また、その上層より牛馬と思われる獸骨が多数出土していることなどから、何らかの祭祀がそこで執り行われたものと考えられる。

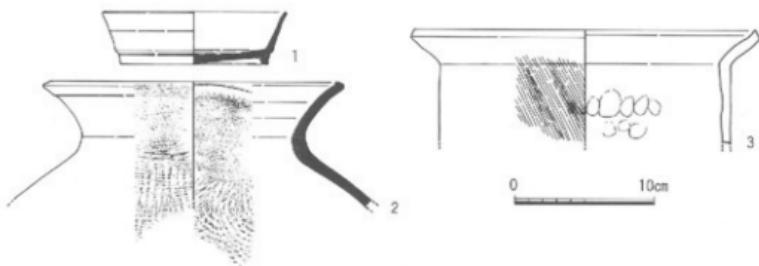
### 古代

古代では奈良時代（8世紀）と平安時代（10世紀）の遺構を検出した。

奈良時代の遺構としては竪穴住居（SH01）、掘立柱建物（SB01・02・08・12）、土塙墓（ST03）、溝（SD27）、大畔、不明遺構（SX01）を調査区ほぼ中央



第3図 SH01 平・断面図



第4図 SH01 出土遺物

部で検出した。

S H 0 1 (第2・3図)はⅡ区で検出されたやや小型の竪穴住居である。検出平面形は東西3.0m、南北3.3mの隅丸方形を呈し、床面積 9.9m<sup>2</sup>を計る。検出面からの深さは0.28mである。北壁中央部に造り付けのかまどをもち、床面より4穴の主柱穴を確認した。床面直上より須恵器(1・2)・土師器が、かまと周辺で土師質の長胴甕(3)が出土している(第4図)。

1は須恵器高台付壺である。底部はヘラ切りされており、体部は直線的に外上方にのびる。底部と体部の境に台形状の高台が付けられている。2は須恵器の甕である。頸部は緩やかに外反し、口縁部は内面を小さく込み出し、外面をわずかに肥厚させ終わらせている。3は土師質の長胴甕である。頸部は「く」の字に外反しそのまま口縁端部に至る。体部外面に刷毛目が施されている。

時期は須恵器より8世紀前半頃と思われる。

調査区中央部ではS H 0 1を取り囲むように掘立柱建物4棟を検出した。これら掘立柱建物は全て0.6m前後のやや大きい掘り形をもつ柱穴で構成されている。調査区中央部で検出したSX01は東西幅は不明であるが南北約12mと平面半円形を呈しており、堆積土はほぼ平坦に埋没している。小水田の可能性が考えた。



第5図 Ⅱ区 遺構検出状況(北西より)



第6図 II区中央部 造構配置図

られる。また、このS X 01からは溝（S D 27）が北部から流れだしている。

掘立柱建物は全て主軸を20~30°西偏せるものである。また、S X 01から流れだすS D 27もほぼこの方位をとっている。この方位は現在の坂出の平野にみられる方格地割の方向に概ね合致するものである。

土塙墓（S T 03）は長辺0.48mの梢円形の掘り形をもつもので、その掘り形いっぽいに横置きされた長胴壺が出土した。この長胴壺は口縁部に壺の下半部で蓋をするもので小児用の壺棺と思われる（第13図）。

以上の堅穴住居・掘立柱建物・土塙墓は出土遺物より同時期と思われる。8世紀前半の堅穴住居は県内で検出されているものでは最も新しいもので、その他の遺構との関係が注目される。

調査区南部で検出されて大畔は、検出面で幅2.4mの地山削り出しでほぼ東西方向に確認された。横断面調査で検出された大畔は南部低湿地部分の縁辺部で検出されており、盛り土の部分と地山削り出しの部分が確認されている。この大畔の延長が遺跡の東辺にあたる今回の調査区でも検出されたことになる。

平安時代の遺構としては土塙墓（S T 01）をⅢ区で検出した。

土塙墓（S T 01）は検出平面形は長方形で、断面は箱型を呈する（第7・8図）。規模は長辺1.81m、西部付近の短辺0.63m、東部付近の短辺0.70m、深さ0.28mを計る。土塙内の西部より下顎および歯が、東部より須恵器（4）・土師器（5・6）が出土している。

4は須恵器の皿である。底部がへら切りされており、体部は直線気味に外上方に延びる。5・6は土師器壺である。5は底部がへら切りされており、体部がやや内脣気味に外上方に延びる。

6は底部がへら切りされて

おり、体部がほぼ直線気味に外上方に延びる。口縁端部内面に凹線状のくぼみが認められる。

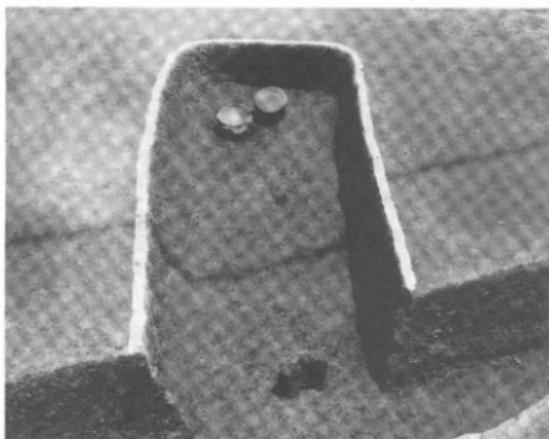
西部より下顎および歯が出土していることから西が頭部、東が脚部になる。

時期は脚部出土遺物より10世紀前半頃と思われる。

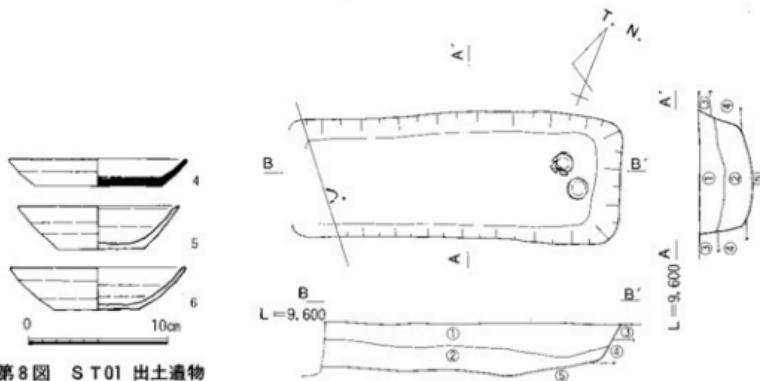
中世

中世の遺構としては掘立柱建物（S B 05-07・

13・14）、土塙墓（S T 0



第7図 S T 01 検出状況



第8図 ST01 出土遺物

- ①深灰色粘質土層（1~4mm程度の砂粒を少量含む）
  - ②暗褐色粘質土層（1~2mm程度の砂粒を含む）
  - ③こげ茶色土層（1~10mm程度の砂粒を含む）
  - ④暗茶灰色砂質土層（1mm以下の中粒）
  - ⑤黄茶灰色砂質土層（シルト質）
- 0 1 m

第9図 ST01 平・断面図

2・04・05), 溝 (SD01・09~13) が調査区北部のI区を中心に検出された。

掘立柱建物と土塙墓は現在の方格地割の方向に合致する溝 (SD11~13) によって集落域は区画されており、その溝から直行する溝 (SD01・09) が掘立柱建物群と土塙墓域を区画している。

### 5. おわりに

今回の川津一ノ又遺跡の調査によって隣接する横断道調査 (川津一ノ又遺跡Ⅲ・Ⅳ区) との繋がりおよび調査区東側を流れる大東川際まで遺構の広がりが確認された。また、弥生時代中期後半にあった低湿地部分が弥生時代後期には完全に埋まり、集落域が広がったのではないかという想定も可能になってきた。この一連の発掘調査結果によって飯野山北麓に広がる各時期ごとの集落の範囲を確定し、その成果を基に現在の大東川の形成時期および坂出の平野の開発にも言及できるものと考える。

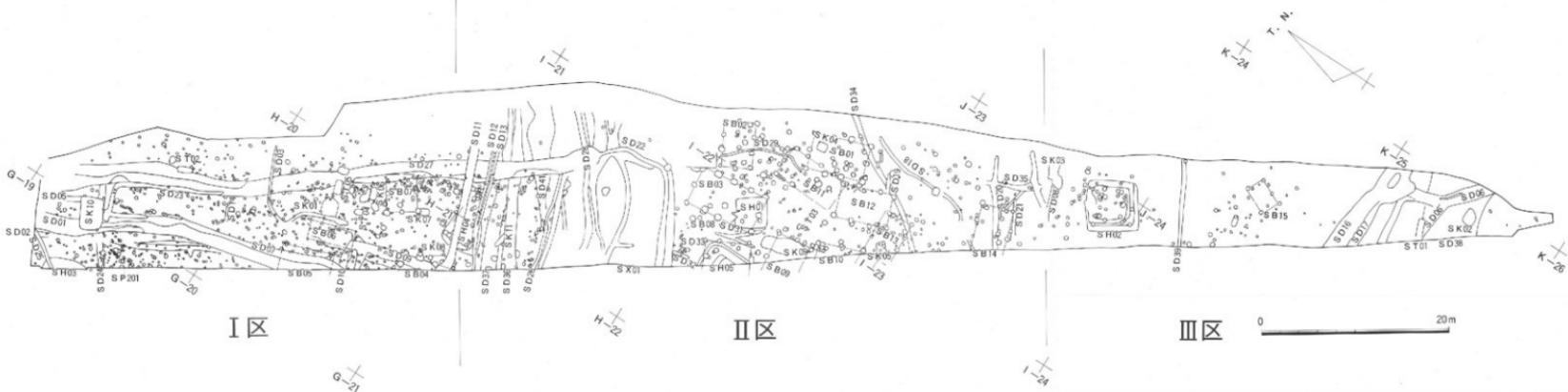
第2表 造構一覧

堅穴住居

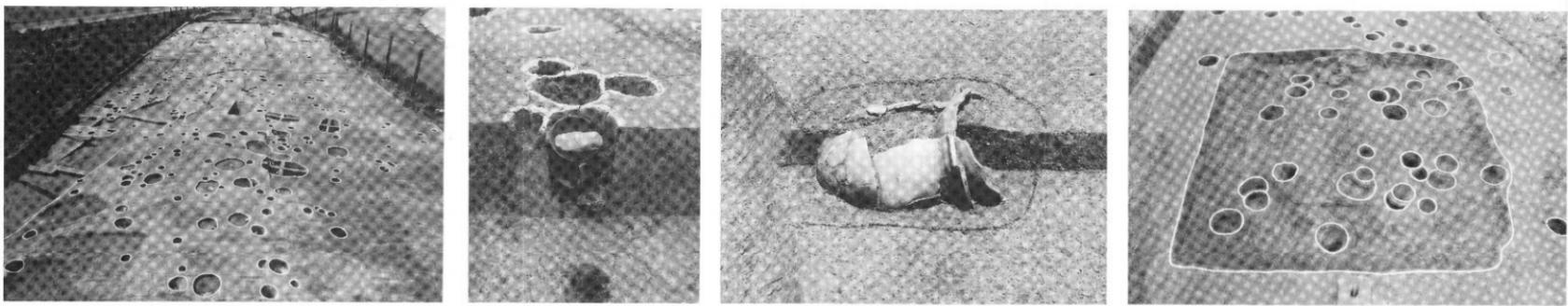
調査区	造構名	形状	幅(3)×奥(2)m	高さ	施設	出土遺物	時期	備考
II区	SH01	隅丸方形	3.3X3.0X0.28	9.9	北辺にかまど	須恵器 土師器	8世紀前半	
I区	SH02	隅丸方形	5.5X5.4X0.08	29.7	北辺にかまど 壁溝	須恵器 土師器	7世紀前半	建替えあり
I区	SH03	円形	直径約5.0		壁溝	弥生土器	弥生時代 中期後半	
II区	SH04	隅丸方形	2.2X1.9X0.44	4.18		弥生土器	弥生時代 後期	
II区	SH05	隅丸方形	深さ0.44		中央に炉	弥生土器	弥生時代 後期	

圓柱柱建物

調査区	造構名	縦(横)×幅	面積m <sup>2</sup>	主軸	時 期	備 考		出土遺物
II区	SB01	2段X3層	24.2	N29°W	奈良時代 (8世紀頃)	一辺約60cmの隅丸方形の柱穴で構成されている。		須恵器 土師器
II区	SB02	2段X3層	15.7	N27°W	奈良時代 (8世紀頃)	一辺約60cmの隅丸方形の柱穴で構成されている。		須恵器 土師器
II区	SB03	2段X4層	31.2	N7°W	7世紀後半～8世紀初	一辺約80cmの隅丸方形の柱穴で構成されている。SH01に切られている。		須恵器 土師器
I区	SB04	(2)段X(3)層		N17°W		一辺約70cmの隅丸方形の柱穴で構成されている。		須恵器 土師器
I区	SB05	(2)段X4層		N19°W	中世 (13世紀)	直徑約30cmの円形の柱穴で構成されている。		須恵器・土器 瓦器
I区	SB06	2段X4層	9.6	N18°W	中世後半	直徑約30cmの円形の柱穴で構成されている。		土師器・土 師質すり鉢
I区	SB07	2段X(3)層		N37°W	中世後半	直徑約50cmの円形の柱穴で構成されている。		土師器 土師質すり鉢
II区	SB08	(2)段X3層		N29°W	奈良時代 (8世紀頃)	一辺約50cmの隅丸方形の柱穴で構成されている。		須恵器 土師器
II区	SB09	2段X(2)層		N6°W	7世紀前半	直徑約50cmの円形の柱穴で構成されている。		須恵器 土師器
II区	SB10	(1)段X(3)層		N23°W		直徑約40cmの柱穴で構成されている。		須恵器 土師器
II区	SB11	2段X4層	21.7	N3°E		一辺約40cmの隅丸方形の柱穴で構成されている。		須恵器 土師器
II区	SB12	2段X3層	21.5	N18°W		一辺約40cmの隅丸方形の柱穴で構成されている。		須恵器 土師器
II区	SB13	2段X(3)層		N1°E	中世 (13世紀)	一辺約40cmの隅丸方形の柱穴で構成されている。		土師器・瓦器 ・鐵製品
II区	SB14	2段X(3)層		N14°W	中世 (13世紀)	直徑約50cmの柱穴で構成されている。		土師器・瓦器 ・鐵製品
III区	SB15	1段X2層	6.0	N25°E	弥生時代	一辺約50cmの柱穴で構成されている。		弥生土器 サヌカイト



第10図 川津一ノ又遺跡 造構配図



第11図 I区 遺構検出状況 (南東より)

第12図 SP201 断面

第13図 ST03 検出状況

第14図 SH02 検出状況

中小河川大東川河川改修事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査概報

## 川津一ノ又遺跡

平成4年度

平成5年3月31日

編集 (財)香川県埋蔵文化財調査センター

発行 香川県埋蔵文化財研究会

印刷 新日本法規出版株式会社